

第3節 ホイアン出土のベトナム焼締陶器の生産地

菊池 誠一

1 はじめに

ホイアン旧市街地の発掘調査によって出土したベトナム産の無釉の焼締陶器（以下、焼締陶とよぶ）はたいへん多い。とくに、ディン・カムフォー地点の溝状遺構と川跡から出土した焼締陶は、その器種や量の豊富さで、17世紀代の在地の焼き物を知るうえで良好な資料である。

ここでは、ホイアン出土の焼締陶を中部地域の窯跡出土資料やわが国出土資料と比較し、その生産地を探る。生産地解明の方法として、素地の胎土分析があるが、これについてはすでに第6章で報告している。

ところで、本論にはいる前に、近年出版されたベトナム陶磁器を紹介する書物や展示会図録などに“ベトナム陶磁”、“チャンパ陶磁”、あるいは“安南焼き”とよぶ用語があり、それについてまず確認しておきたい。

2 ベトナム陶磁、チャンパ陶磁、“安南焼き”

ベトナム陶磁とは、ベトナム領土内で生産された陶磁器の総称である。しかし、ベトナムの歴史は複雑である。ベトナムは西暦紀元後1世紀から10世紀までは中国に支配されていた。その後、独立封建国家である李朝（1009～1225年）、つぎに陳朝（1225～1400年）が興り、南のチャンパ王国（紀元後2～17世紀？、現在の中部地域にあったオーストロネシア系の国）とたびたび抗争を繰り返し、領土を拡張していった。陳朝下には、現在のフエ地域をその支配下にいった。そして大越の黎朝は1471年にチャンパの都城であるヴィジャヤ（現在のビンディン省）を破壊し、チャンパは現在のフーイエン省以南に退いた。そして、16世紀後半にベトナムは南北対立の時代をむかえ、南部（現在の中部）に覇権をにぎった阮氏（広南阮氏）が南に領土を拡張し、1700年にはカンボジアからサイゴンを奪い、メコンデルタ地域を支配下にしている。

このベトナム領土内で生産された陶磁器は、北属時代の灰釉陶器などがあり、李朝下では白磁や白地褐彩壺、陳朝下では白地褐彩壺・青磁・青花などが生産された。また各時代にわたった生産がつづけられた無釉陶器などが知られている。ベトナムの研究者によって各時代の窯跡の発掘調査や陶磁器研究がおこなわれているが、李朝・陳朝期の実態については不明な点が多い。黎朝・莫朝の陶磁器生産に関しては、現在の北部ハイフン省で青花を焼いたチュウダオ窯跡群の発掘や中部各省の焼締陶窯跡の発掘調査がおこなわれている。16～18世紀の生産の実態がじょじょに解明されている^{1・2)}。このベトナム領土内で生産された

- 1) 菊池誠一 1997「中部ベトナムの陶磁生産と日本-16~17世紀の日越交流-」『物質文化』第63号、1-22頁
- 2) 菊池誠一 1998「近年のベトナム陶磁史研究の成果と課題」『物質文化』第64号、29-40頁
- 3) 青柳洋治 1996「チャンパ陶磁をめぐる二、三の問題」『青い焼きもの』
- 4) 山形真理子 1997「林邑建国期の考古学的様相-チャキユ遺跡の中国系遺物の問題を中心に-」『東南アジア考古学』第17号、167-184頁
- 5) 後藤均平 1975「ベトナム救国抗争史」新人物往来社
- 6) 三上次男 1984「ベトナム陶磁と陶磁貿易」『世界陶磁全集 16南海』209-235頁、小学館

陶磁器をベトナム陶磁とよぶことができる。

また、近年ビンディン省における14~15世紀頃の窯跡調査によって、この時期のチャンパ王国の陶磁器生産の実態が解明された。おもに、輪状釉剥ぎを施した青磁碗・皿・鉢、見込みに目跡のある青磁碗などや施釉陶器、無釉陶器、瓦などが出土している。これらの製品は同時代のベトナム産の陶磁器の様相と相違していることが確認されている。チャンパ陶磁は、ヴィジャヤに都城があった11世紀から14世紀の間に生産が開始され、またラムドン省のダイラン墓地遺跡出土の陶磁器から17世紀後半から18世紀初頭まで生産がおこなわれていたと考えられている³⁾。

このチャンパ王国の版図下で生産された陶磁器を、ベトナム陶磁と区別して“チャンパ陶磁”とよぶことができる。ただし、チャンパ陶磁の実態は先に指摘したように、14~15世紀の窯跡の調査がおこなわれているだけであり、それ以前や以後は窯跡は不明であり、その実態は十分に解明されているわけではない。また、チャンパという国名がはじめて登場するのは、7世紀になってからである。それ以前は、中国資料から「林邑」とよばれていた。この林邑国の都と考えられているチャキウで発掘調査がおこなわれ、在地産の印紋陶や土器などが出土している⁴⁾。今後は、これらの資料をも含めてチャンパ陶磁の実態を解明していかなければならないだろう。

では、“安南焼き”とはなんであろうか。“安南焼き”とは、ベトナム陶磁をさすという。しかし、後藤均平氏がすでに指摘されたように、“安南”とは支配者であった中国側が「南方を鎮安する」ことからでた造語であり、ベトナムが独立し以来、正式名称としたことはなかった⁵⁾。ベトナムの国名は“大越”であり、“越南”であった。しかし、支配者の意識でつらぬかれた呼称は、フランス植民地支配でも行政区画の用語として残り、学術用語として使用されてきた経緯がある。ベトナム自身とは無関係に支配者意識によって使用されつづけてきたことを考えるならば、“安南焼き”の用語は不適切である。すでに三上次男氏も同様な指摘をし、「安南の称は、具体性がないのみか、意味の混乱するおそれもある」⁶⁾とし、ベトナム陶磁と呼ぶことを提唱した。“安南焼き”の用語は、わが国に伝世した茶陶のみに限定すべき用語であり、ベトナム陶磁全般に普遍化することはできない。

少し、前置きが長くなったが、ではつぎにホイアン出土の焼締陶の生産地の問題にうつろう。

3 中部ベトナムの窯跡とその製品

ホイアン出土、とりわけディン・カムフォー地点の溝状遺構と川跡から出土した焼締陶や土器は、その器種の豊富さや量の多さが指摘できる。これらの焼締陶・土器は、貯蔵具として使用された長胴瓶や食器洗い具として使用された大鉢、煮炊具として使用された鉢や土器、そしてその蓋、嗜好品の用具として使用された石灰壺、陶製キセルなどがある。これらの製品がどこで生産された

のかは、17世紀代の流通や政治状況、社会的諸関係を考えるうえで重要である。

では、まず中部の窯跡とその出土資料を紹介する。

(1) フエ・ミースエン・フックティク (My Xuyen・Phuoc Tich) 窯跡群

ミースエン・フックティク窯跡群は、中部のトゥアティエン・フエ (Thua Thien-Hue) 省フォンディエン (Huong Dien) 県のミースエン地区とそれに隣接するフックティク地区に広がっている窯跡群である。クアンチ省との境をなすオロ (O Lo) 川の右岸に位置している。

1993年にベトナム考古学研究所がミースエン地区で発掘調査をおこない、窯跡の一部と物原を検出している。しかし、窯構造に関しては保存状態がよくなく、不明である。物原から出土した陶磁器は、大量の焼締陶と16世紀中頃から17世紀前半代の中国磁器、17世紀後半の肥前磁器などであった。そのため、この窯跡の年代は16～17世紀代の年代があたえられるが、18世紀代の生産に関しては不明な点が多い。また、『鳥州近録』(1553年)に、「勇敢之人、陶土成器」(肇豊府金茶県の条)とあり、この地域での生産のことが記されており、文献資料からも上記のことを確認することができる⁷⁾。

遺物は3カ所のトレンチから出土しており、長胴瓶 (Ⅰ類・Ⅱ類) と壺・瓶 (Ⅱ類、Ⅲ類)、鉢 (Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅳ類)、大形鉢 (Ⅱ類)、蓋 (Ⅰ類、Ⅱ類)、甗、石灰壺 (Ⅰ類、Ⅱ類)、サヤあるいは焼台 (浅鉢Ⅱ類)、灯明皿、陶製キセルなどがある (図90)。これらの製品は、ミースエン窯跡で確実に生産をしていたことが判明している。

(2) クアンチ (Quang Tni) 省フックリー (Phuoc Ly) 窯跡群

遺跡はヴィンリン (Vinh Linh) 県ヴィンザン (Vinh Giang) 社 (社とは行政村のこと) フックリー地区にある。ベンハイ (Ben Hai) 河の左岸に位置し、河口まで約8kmである。

1994年にハノイ総合大学が1基の窯跡を発掘したが、床面のみの残存で構造に関しては不明である。窯内から波状文のある長胴形の容器、石灰壺 (Ⅱ類) などが出土している。調査者は、17世紀末から18世紀はじめ頃と推定している。筆者は、この窯跡周辺で17世紀初頭前後の福建窯系陶磁器片や17世紀後半の肥前磁器片、そして在地産の焼締陶片を採集している。そのため、過去に数基あったという窯跡群の年代は、17世紀前半頃までさかのぼる可能性があらう⁸⁾。

(3) クアンビン (Quang Binh) 省ミークオン (My Cuong) 窯跡群

遺跡はドンホイ (Dong Hoi) 市ギアニン (Nghia Ninh) 社ミークオン地区にあり、ナヤット (Nhat Le) 河の支流であるミークオン川の左岸に位置している。河口まで約10kmである。

1996年にベトナムと日本チームの合同で第1次調査をおこない残存する9基の窯跡を確認した。そして、翌年の3月に3基の窯跡の部分発掘調査を実施した。その結果、出土遺物や文献資料によって、この窯跡群は北部鄭氏と中部の広南阮氏の抗争が終結する1672年以降に成立した可能性がたかいことが判明した。19～20世紀頃と考えられる1a号窯、18～19世紀頃と考えられる1b号窯

7) 菊池誠一 1997 「16, 17世紀の中部ベトナムの陶磁生産－ミースエン遺跡出土遺物とその意義－」『考古学研究』第138号、22－34頁

8) 1)と同じ

の物原から、蓋（Ⅰ類、Ⅲ類）、皿（灯明皿など）、鉢（Ⅱ類）、広口壺などが出土し、長胴瓶はみられなかった。また、1b号窯の床直上付近から中国徳化窯の18～19世紀前半頃の白磁小杯が出土した。2号窯の大半は破壊されており、わずかに数点の遺物が出土したが、そのなかで煙出しの柱とおもわれる部分に長胴瓶（Ⅰ類）の底部が埋められていた。3号窯の物原から、長胴瓶（Ⅰ類）や内傾した頸部で肩部にゆるやかな波状文と平行沈線があり、横耳のつく長胴瓶、壺・瓶（Ⅲ類）、蓋（Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類）、鉢（Ⅱ類）、浅鉢（Ⅰ類、Ⅱ類）、大形鉢（Ⅰ類）、灯明皿、四耳壺などが出土した（図90）。また、周辺の窯跡から採集された遺物に、頸部がほぼ垂直で玉縁状の口縁部をもち、肩部に波状紋と横耳をもつ長胴瓶（Ⅳ類B）がある⁹⁾。

9)手塚直樹・大橋康二・菊池誠一・續伸一郎 1998「中部ベトナム・クアンビン省ミーコン窯跡群の発掘調査ー日本出土ベトナム陶磁の生産地をもとめてー」『日本考古学協会第64回総会 研究発表要旨』

(4) ホイアン市タインハー（Thanh Ha）窯跡群

ホイアン市の旧市街地から西約4km、トゥボン川の左岸に位置し、河口から約10kmのところである。タインハーとは旧社名であり、現在はカムハー（Cam Ha）社に属している。このカムハー社のナムジュウ（Nam Ducu）には、現在も陶器・土器を焼く専門村がある。タインチュム（Thanh Chiem）在住のゲンヴェット家保管の『青霞 阮日三派譜録』（1806年）によると、「自北圻清化省香江社従朝南来蒞広南營」とあり、北部タインホアから16世紀中頃に広南阮氏の“南遷”にしたがってタインハーにきたという。また、村の聞き取り調査に

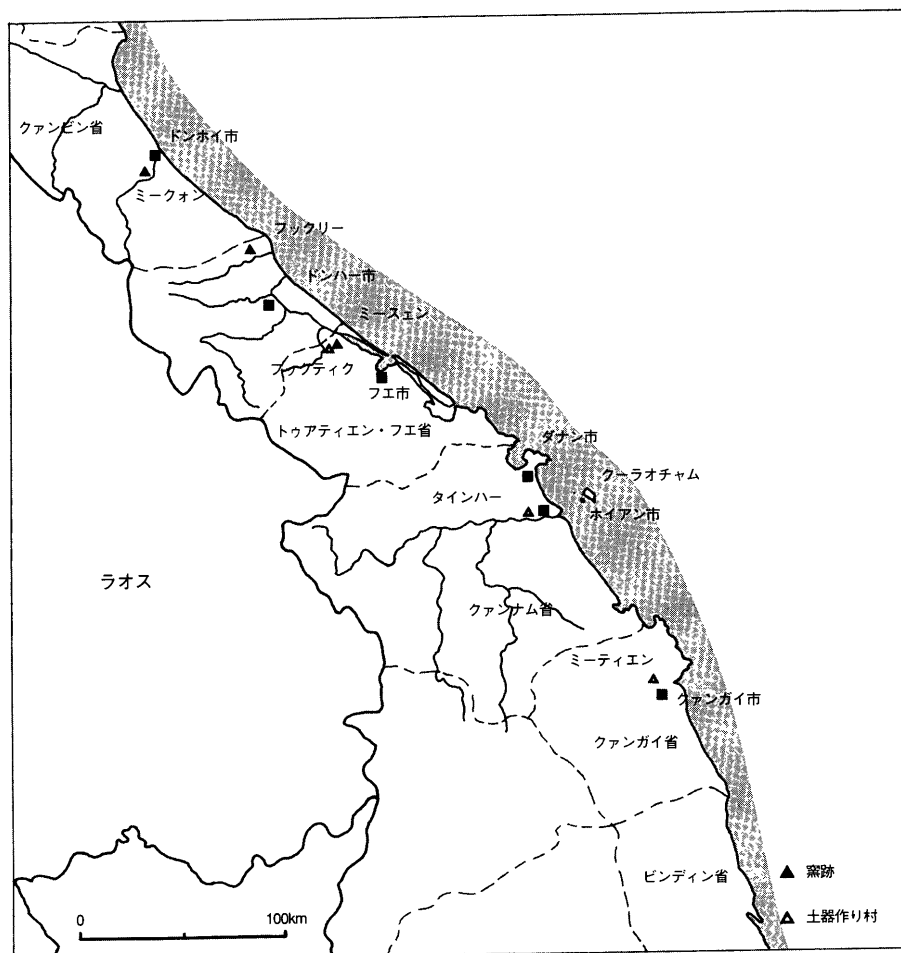


図89 中部ベトナムの窯跡

よって、ナムジュウ以前はタインチュム（旧タインハー社内）で土器づくりをおこなっていたという¹⁰⁾。このタインチュム地区で、1989年にハノイ総合大学（現ハノイ国家大学）が発掘調査を実施し、17世紀初頭前後の中国陶磁器や1640年代生産の肥前磁器瓶、17世紀後半の肥前の“日”の字鳳凰文皿や荒磯文碗、そして肩部に波状文のある長胴瓶などの焼締陶が出土した。しかし、窯跡の遺構は未検出である。この詳細については未発表であり、不明な点が多い。筆者は、伝承や出土遺物などからこのタインチュム地域に17世紀にさかのぼる窯跡の存在を想定している。今後の考古学調査の重要な課題と位置づけている。

10) 菊池誠一・阿部百里子 1998
「ベトナム中部のホイアン・
タインハーの土器づくり」
『古代学研究』第142号、22-
33頁

4 焼締陶器の比較

ディン・カムフォー地点出土の焼締陶や土器類は図88に示したように豊富である。これらの資料を上記の窯跡出土遺物とわが国出土の遺物（図91）と比較してみよう。

(1) 長胴瓶

I類Aは、口縁部に二本の沈線をほどこす大形の容器である。このタイプは、ミースェン窯跡やミークオン窯跡出土遺物のなかに確認することができる。

I類Bは、I類Aよりも小形のものである。ミースェンやミークオン窯跡出土遺物のなかにあり、このタイプは広く中部地域の消費地遺跡で確認することができる。また、長崎市内遺跡や堺環濠都市遺跡、大坂城下町遺跡、京都市内遺跡、小田原城遺跡などで出土している。

II A類は、肩部に波状文と平行沈線文をほどこすタイプである。器壁が薄く、胎土は精緻でしばしば層状を呈している。このタイプは、ミースェンやミークオン、フックリーの各窯跡出土遺物のなかにみられない。ディン・カムフォー地点の溝状遺構や川跡出土遺物のなかでも、決して客体的に存在しているわけではない。また、ホイアン地域の消費地遺跡や広南跡からも表面採集されている。そのため、この地域の17世紀代の普遍的な容器と考えられる。しかし、このタイプが現在までのところ窯跡資料からみられないということは、別の窯の存在を予想させるものである。まだ窯跡の検出はないものの、ホイアンに近接するタインハーはその有力な候補地になるかもしれない。

II類Bは、肩部に凸帯がつくタイプである。ミースェンやミークオン窯跡ではみられない。ホイアンでも出土量が少ない。

II類Cは、やや内傾する口縁部で端部はA類よりも、少しつきあがるような形状のものである。肩部に沈線や波状文がほどこされる。このタイプは、ミースェンの資料にあるが、これはやや後出の感じがする。また、長崎市栄町遺跡から出土している。

ほかに、口縁端部が屈曲するタイプで肩部に沈線と波状文をほどこす長胴瓶がある。このタイプは、ホイアンでの出土例はないが、ミースェン窯跡にあり、また大阪道修町の17世紀中頃の遺跡から出土している。

III類は、口縁部に沈線があり、肩部に沈線と波状文をほどこすタイプである。

このタイプはホイアンの出土例では1点しかない。窯跡資料からもまだ確認されていない。しかし、クアンチ省の消費地遺跡から表面採集されている。

Ⅳ類は、他の長胴瓶と比較すると頸部が長く、口縁端部が玉縁状を呈するものである。これは、A・Bに細分され、出土量はたいへん少ない。Ⅳ類Aは、頸部がやや外反し、口縁端部が玉縁状を呈する。肩部に沈線と“縄簾”とよばれる文様がある。このタイプの生産地は北部である。北部のハイフン省のベンリンサー窯やランゴム窯跡、またタインホアやゲアンの窯跡、消費地遺跡でよくみられる。また、堺環濠都市遺跡で4点、大坂城で破片数点、長崎市内遺跡で数点出土している。堺環濠都市遺跡出土例では、慶長20年（1615年）の焼土層を初現として、17世紀中頃に出土している¹¹⁾。わが国での出土量はⅠ類よりも少ない。Ⅳ類Bは、ほぼ直立する口縁部で、肩部に沈線と波状文があり、4個の横耳がつく。ディン・カムフォーではこの1点しか出土していない。現在までのところ、このタイプはクアンビン省ミークォン窯跡資料にある。北部の影響が考えられる。

Ⅴ類は、北部産と考えられる資料である。筆者は北部ハイフン省ミーサー窯跡出土遺物のなかにこれと類似する胎土の遺物を確認している。

Ⅵ類は、口縁部がやや内湾し、端部が横に少し引き出したような形状である。ホイアンでは2点しか確認できない。中部の各地でも未確認である。しかし、堺環濠都市遺跡から類似するタイプが1615年の焼土層から出土している。

Ⅶ類は、上記以外のタイプである。各1点ずつ出土している。Ⅶ類—3は、Ⅲ類からの変化であろう。

(2) 鉢

Ⅰ類は、大形の容器である。これらの遺物は中部の各消費地遺跡でみられる。Ⅰ類Aは、胴部があまり張らないタイプで、条線がほどこされる。このタイプは、フエ・ミースェン窯跡で出土している。また、堺環濠都市遺跡出土でも大形のものがある¹²⁾。Ⅰ類Bは胴部が張るタイプで、これはまだ他遺跡から確認されていない。

Ⅱ類は中形のタイプで、ディン・カムフォー地点をはじめ、中部の各遺跡から普遍的に出土している。Ⅱ類は、最大径の位置によって3つに細分される。最大径が口縁部にあるもの（Ⅱ類A）、胴部中央にあるもの（Ⅱ類B）、そして底部近くあるものである（Ⅱ類C）。わが国では、堺環濠都市遺跡や大坂城、長崎市内遺跡などからⅠ類Bが出土している。堺環濠都市遺跡例は、1615年の焼土層からの出土である。また、伝世した茶陶にⅠ類Cがみられる。しかし、この相違は時期差を反映するものではなく、工人の差などの範疇で考えられるものであろう。

Ⅲ類は胴部に条線がない、無文のタイプで、やや大形のものである。Ⅳ類は小形のものである。Ⅳ類は、フエ・ミースェン窯跡で出土している。わが国の遺跡ではまだ確認されていないが、伝世した茶陶のなかにみられる。

11) 續伸一郎 1990「堺市環濠都市遺跡出土の貿易陶磁(Ⅰ)－出土陶磁器の分類を中心として－」『貿易陶磁研究』No.10、143-167頁

12) 11)と同じ

V類は、波条文をほどこすタイプである。他遺跡からは未確認である。

(3) 浅鉢

I類は、器高が低いものである。長崎市高島遺跡から出土している。

II類は、I類に比べると器高が高く、また口縁端部の作りが違うタイプである。このタイプは、ミースェン窯跡やミークォン窯跡、14～15世紀のチャンパの窯跡であるゴーサイン窯跡からも出土している¹³⁾。わが国で、長崎市の築町遺跡¹⁴⁾や堺環濠都市遺跡から出土している。

(4) 大形鉢

このタイプは、胴部上半に波条文をほどこすI類Aとそれがない無文のI類

13) 森本朝子・大橋康二 1997
「ベトナム・ビンディン省ゴーサイン2・3号窯の発掘調査」『東洋陶磁』第26号、49～68頁

14) 長崎市教育委員会 1997『築町遺跡』

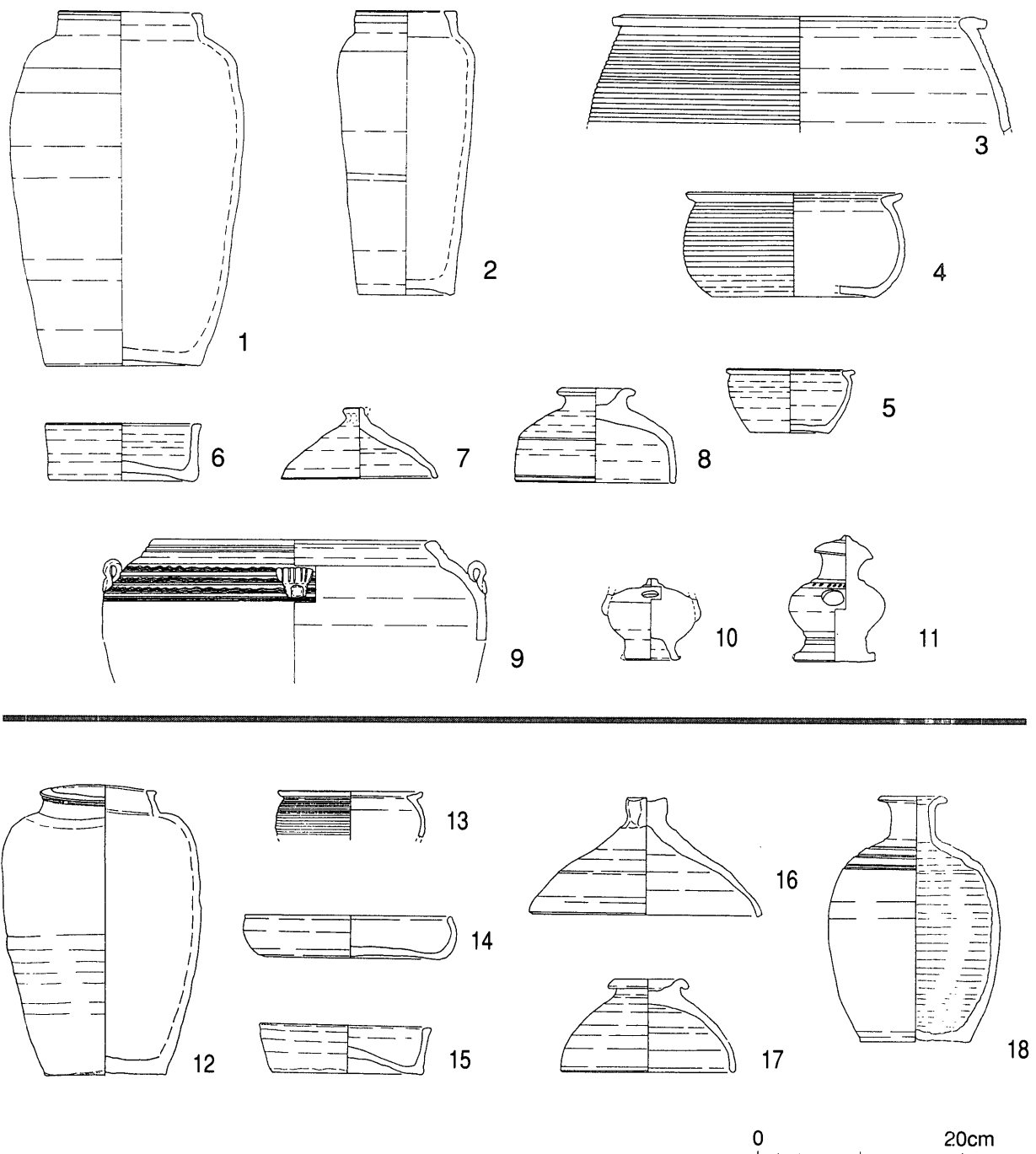


図90 1～11、フェ・ミースェン窯跡出土品、12～18、クアンビン・ミークォン窯跡出土品

Bがあり、フエ・ミースェン窯跡で出土している。また、ミークォン窯跡では、胴部に平行沈線のはいるタイプが出土している。わが国ではまだ確認されていない。

(5) 蓋

I類（山形でつまみ部）、II類（逆高台形のつまみ）、III類（ボタン状のつまみ）、IV類（幅広のつまみ）、V類（その他）がある。

I類は、中部の各遺跡で普遍的にみられるタイプである。フエ・ミースェン窯跡やクアンビン省ミークォン窯跡で出土し、クアンチ省フックリー窯跡採集遺物のなかにみられる。また、現在でもこのタイプの蓋の生産が中部でおこなわれている。鉢II類とセットになり、煮炊きに使用するものである。わが国では長崎市栄町遺跡から出土し、伝世された茶陶のなかにもある。

II類は、フエ・ミースェン窯跡やクアンビン省ミークォン窯跡で出土している。このタイプは、わが国ではまだ確認されていない。

III類は、ディン・カムフォーで1点しか出土していない。ミークォン窯跡から出土している。

IV類は、ほとんどみかけない資料である。

V類は、類似するものがミークォン窯跡資料のなかにある。

(6) 壺・瓶

I類はたいへん少ない。II類は、四耳壺で肩部に凸帯と波状文をほどこす。ディン・カムフォー地点ではたいへん少ないが、ホイアンの他遺跡などからも出土し、現在でもこのタイプの系譜をひく壺が伝世している。このタイプは、フエ・ミースェン窯跡で出土し、また長崎市栄町遺跡からも出土している。

III類は、頸部がすぼまり、肩部に沈線をほどこす。このタイプは、ディン・カムフォー地点ではたいへん少ないが、フエ・ミースェン窯跡やクアンビン省ミークォン窯跡で出土している。このタイプの底は糸切り底である。わが国では、まだ確認されていない。

IV類は広口壺である。ミースェン窯跡やミークォン窯跡で出土している。

V類は胴部に条線がある広口壺であるが、他遺跡からまだ確認されていない。

(7) 石灰壺

I類は、把手のあるタイプで、北部の伝統的な形態である。しかし、フエ・ミースェン窯跡やクアンチ省フックリー窯跡でも出土している。

II類は、把手のないタイプで、北部ではみかけないタイプである。フエ・ミースェン窯跡やクアンチ省フックリー窯跡で出土している。

(8) 大形容器

大形容器は数が少なく、口縁部形態がわかるものが1点しか出土していない。このタイプは他遺跡では未確認である。

以上がディン・カムフォー地点の資料と中部の窯跡資料やわが国で出土した遺物や伝世品との比較である。

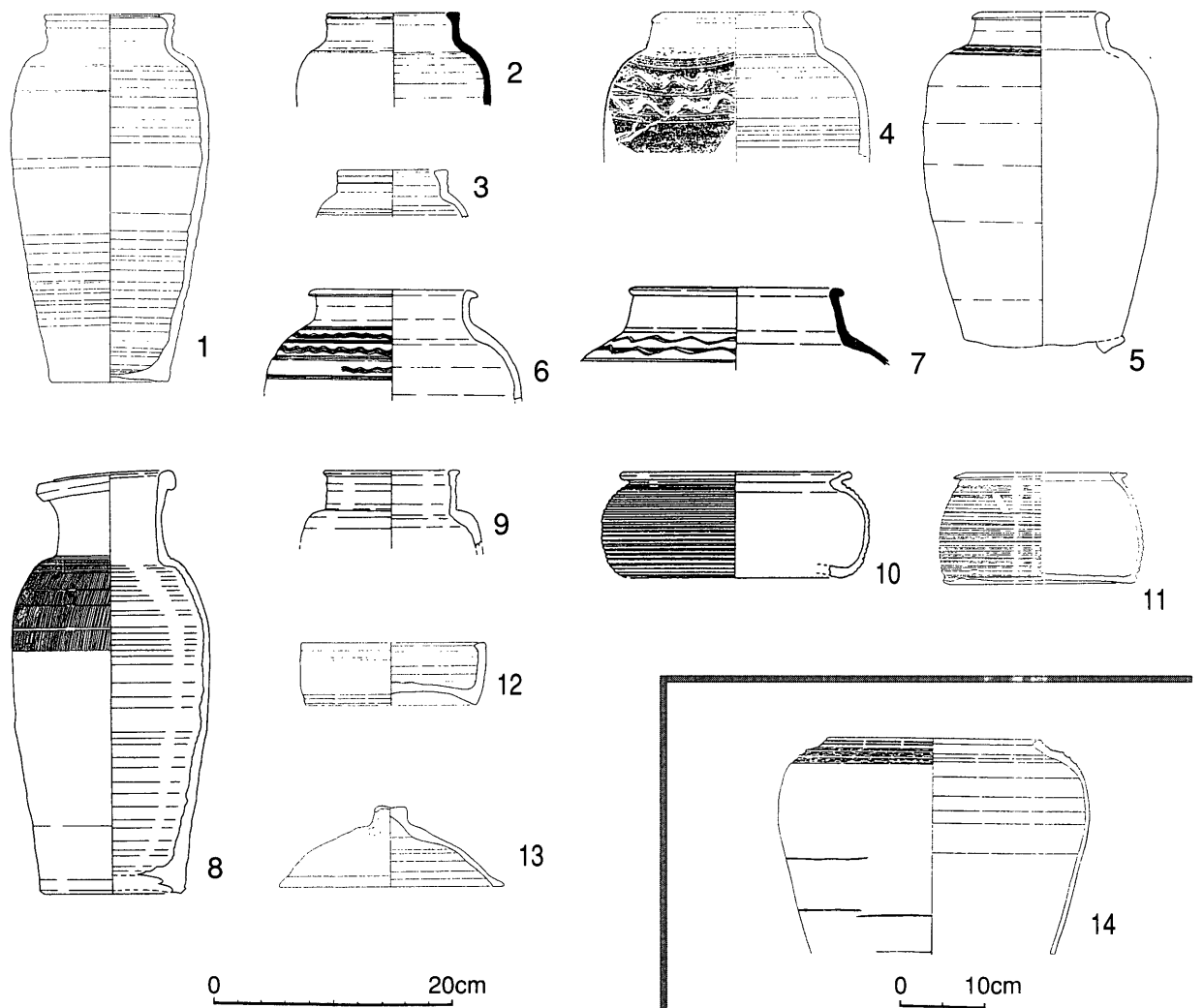


図91 1・12：長崎市築町遺跡、2：京都市内、3：小田原城、4・13・14：長崎市栄町遺跡、5・6：フエ・ミースエン窯跡
7：大坂城下町遺跡、8・9・10：堺環濠都市遺跡

5 ホイアン出土焼締陶の生産地

ホイアン出土焼締陶のうち、長胴瓶Ⅰ類、鉢Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類、浅鉢Ⅰ・Ⅱ類、大形鉢Ⅰ・Ⅱ類、蓋Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類、壺・瓶Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類、石灰壺Ⅰ・Ⅱ類は、フエ・ミースエン窯跡やクアンチ省フックリー窯跡、クアンビン省ミークオン窯跡の出土遺物と類似しているため、中部で生産されていたことは確かであろう。また、長胴瓶Ⅱ類のうちAはホイアンで比較的多く出土しているため、この地域の生産が考えられる。B類も作りからそうであろうが、出土数が少なくはっきりとしない。C類は生産されたかははっきりとしないが、フエ・ミースエン窯跡で出土しているため、中部産の可能性があろう。

また、Ⅳ類Aは北部産である。その根拠は中部の窯跡でこのタイプの出土例がないこと、また北部の窯跡でこのタイプの遺物がかなり表面採集されること、北部の港跡でこのタイプが出土していることによっている¹⁵⁾。Ⅳ類Bは、フエ・ミースエン窯跡の遺物ではなく、またホイアンでも1点の出土であるため、フエやホイアン地域での生産は考えられない。この資料と類似する遺物がクアン

15) 安里嗣淳・菊池誠一・金武正紀・手塚直樹 1998「ベトナム陶磁調査紀行」『史料編集室紀要』第23号、143-166頁

ビン省ミークォン窯跡で出土しており、北部との接触のなかで生まれたタイプかも知れない。Ⅴ類は北部産である。Ⅵ類やⅦ類、蓋Ⅳ・Ⅴ類、壺・瓶Ⅰ類は出土例が少なく、生産地について言及することができない。今後の資料の増加を待ちたい。

ところで、現在のところ広南阮氏治下17世紀代の中部地域の窯跡は、上述したようにクアンビン省ミークォン、クアンチ省フックリー、フエ・ミースェンの3地点で確認されている。ホイアン・タインハーは窯跡が未検出ながらも、その可能性が考えられる。これらの窯跡の年代は、ミークォンが17世紀後半以降の生産であり、フックリーは17世紀初頭前後から、ミースェンは16世紀からの生産である。ホイアン・タインハーは17世紀には生産がおこなわれていたと考えられる。

また、ホイアンとこれらの窯跡との地理的条件は、ホイアン・タインハーが近距離で、つぎにフエ・ミースェンである。ミースェン出土の陶製キセルがホイアンで出土しており、この時代にミースェン窯とホイアンの交流が証明される。フックリーやミークォンはホイアンから遠い。また、第6章で報告したように、胎土の化学成分分析の結果、クアンビン省ミークォン窯跡資料は、ディン・カムフォー地点の遺物やわが国出土のベトナム焼締陶の胎土と類似していないことが確認されている。類似点が高いのは、フエ・ミースェン窯跡資料と堺環濠都市遺跡資料、ディン・カムフォー資料、京都市内資料である。また、消費地遺跡同土では、ホイアン・タインハーのタインチェム遺跡と長崎市内の資料が類似していたが、これに該当する窯跡資料はなかった。このことは、長崎市内出土の焼締陶（図80—18、155頁）がディン・カムフォー地点のⅡ類Aと類似し、これは先に指摘したように、ホイアン地域（タインハー）にその生産地を求められる可能性があり、タインチェム遺跡の陶片と類似していたことは興味深い一致である。

以上のことにより、ホイアン出土焼締陶のなかで、中部産焼締陶の大半はフエ・ミースェンやホイアン・タインハーで生産されたものと考えられる。

6 今後の課題

ディン・カムフォー地点から出土したベトナム焼締陶の生産地を考えてきた。こうした生産地の解明は、中部地域や流通や国外の流通を考えるうえで大切な課題である。

17世紀代のベトナムは、北部の鄭氏と中部の阮氏が覇をきそい、1627年から約50年間、大規模な戦争を繰り返してきた。この間、北部は中部の物資の交流はほとんどなかったと思われ、その状況の反映がホイアン地域に17世紀代の北部ベトナム産陶磁器のほとんど出土しないことのあらわれである。ディン・カムフォー地点でわずか数点の北部産焼締陶の出土は、この政治的状況の反映であろう。また、北部産の青花碗・皿類もまったく出土せず、それに代わって中国青花や肥前磁器の碗・皿類が出土するのも、その状況の反映であろう。

このことは、ベトナム国内の状況ばかりではなく、わが国出土のベトナム焼締陶の生産地を考えるうえでも重要な視点である。つまり、北部産か中部産かの認識を深めることによって、日本とベトナムの交易関係の実態を追求することもできると思われるからである。

今回は、おもにディン・カムフォー地点出土の焼締陶を中心にその生産地を論じた。今後は、各窯跡群の地域色を抽出することやその変遷をあとづけることも課題である。さらに、各窯跡群ごとの様相を把握することで、その製品の流通や流通圏の変化を歴史上に位置づけていくことも課題である。また、北部産の焼締陶の実態やその流通、北部産焼締陶と中部産焼締陶との関係、日本出土の北部産と中部産の在り方からみた日本とベトナムの交易関係などが課題であり、これらの問題に関しては今後別稿で論じるつもりである。